

## 児童健全育成賞 佳作

# いつだって子どもの味方！児童館長にできたこと — 忘れられない子、子どもの心に寄り添った実践録 —

東京都日野市

日野市立基幹型さかえまち児童館 館長 佐々木 哲

## 1. はじめに

児童館・学童クラブ・市役所子育て課と30年勤務した体験の中で、記録に残しておきたい事例がある。本論文では、私が館長として対応し、館外に出て関連機関と連携（社会福祉援助）をし、さらに、根幹にある課題は現在も他地域で存在する事例を挙げた。

事例の選定理由は以下の3点である。①個人情報への対応として、当事者であった本人が現在、成人しており本人の許可を得ている。②根幹の課題は現在も他地域で共通した課題と考えられる。現在の各種制度では、どこの部署が対応するか決まっておらず責任を問えるものではない。ただし、子ども自身は著しく困難な事態に陥っている。③私の経験した多くの事例の中でも特に記録として残しておきたい、ものを選んだ。

本論文は作成するにあたり、個人が特定されないよう名前や家族構成等を変えて記述する。変更しても意図は十分に伝わると考えている。

## 2. 忘れられない子

### (1) 子どもひとり救えないのか

私が児童館長になって3年目にして、館長として初の異動で2館目の児童館に着任したばかりの春のことだった。会議の終了後、所属部のO部長から「ちょっと佐々木さん、この子知っている」と呼び止められた。その子は、私が学童クラブ（以下「学童」）職員として勤務

していた時、在籍していた児童、愛子（アイコ仮名）だった。

愛子は母親と二人暮らしをしていたが、母親がアパートの家賃を滞納しており、立ち退けと言われていた。愛子は中学生の時、諸事情で児童相談所（以下「児相」）に一時保護されていた。保護観察処分にも関わっており愛子には児相も保護司も子ども家庭支援センター（以下「子家セン」）も関わっていた。また、二人暮らしの生活は厳しく生活保護家庭でもあった。つい最近、母親がボーイフレンドの所に行ってしまった。愛子は一人置いていかれてしまった。ネグレクトである。母親が家賃を支払わないため、立ち退きを迫られたアパートは、愛子と仲間のたまり場になっていた。子家センの担当者も本人を何とかしようと訪問するが、なかなか進展がないと言う。「この子を知っていて会う機会があったら自立援助ホームに入るように勧めてみてくれないか」という相談だった。「子ども一人を何で救えないんだ…」と吐き捨てるようにO部長が悔しそうにつぶやいた。

自立援助ホームとは、なんらかの理由で家庭にいらなくなり、働かざるを得なくなった15歳から20歳まで（当時の成人は20歳だった）の子どもたちに暮らしの場を与える施設である。安心して生活できる場を提供し、社会で生き抜く力を身に付け、子どもたちが経済的にも精神的にも自立できるように援助する事を目的としている。自立援助ホームに入るには、一

度、見相で一時保護を受け、一時保護施設で自立援助ホームを探し、適した自立援助ホームへ入所する手順だった。

当時、私が接する機会のある上司は、課長や課長補佐であり、部長と話す機会はほとんどなかったので呼び止められて驚いた。愛子に関する関係者会議がすでに何度か実施されていた。私は愛子の住んでいる地域外に勤務していた為か、関係者と思われていなかったのか会議には呼ばれていなかった。初めて聞いた話だった。「愛子は私が学童2年間見ていた子です。私に懐いてくれていたので良く知っています、会う機会があれば話してみます」と軽く返事をした。この時は、子家センを中心に、専門職である多くの大人が関わっているので、時間が経てば解決するだろう、と楽観視し気にしてなかった。

## (2) 愛子との出会い

愛子と初めてあったのは、愛子が小学2年生の時だった。本当の名前は愛（アイ仮名）だったが、チョロチョロし過ぎるので、みんなからいつの間にか「愛子（アイコ仮名）」と呼ばれるようになっていた。小柄な愛子だが、とてもパワフルで、とにかく動き回っていた。愛子は人なつこく、私によく飛びついてきた。右手に校庭で使うボールや縄跳びが入ったカゴを持ち、左手には愛子を抱えて歩くことがあった。学童で事件があるといち早く現場に駆けつけて、余計なお世話を焼くのが愛子だった。ただ、ほとんどお世話は感謝されずに終わっていた。

おやつ時間に1年生が麦茶をこぼし悲鳴を上げると、2年生の愛子は別のテーブルにいたが、台布巾をもって立ち上がり「しょうがねえな」と言って拭きに向かう、その途中で愛子の足が別のテーブルに引っかかり、関係ない子の麦茶までこぼした。「愛子、分かったからお世話しないでいいから」と職員に言われる。また別の場所で喧嘩が起こると、素早く愛子が行き「けんかしてんじゃねえぞ」と仲裁に行く。喧嘩の理由を職員が訪ねると、内容は分かっている

が愛子は口を挟んでくる「先に殴ったのはこっちだ」と愛子が見ていた場面から説明する。他に見ていた子に「違うよ、愛子、おまえ最初からいなかったじゃないか口出すなよ」と言われてしまうのだった。

いつも誰かのお世話をしようとしては空回りするのが愛子だった。口は悪く、「うるせよ」「だまれ」など言うが、目は笑っていて本心で罵倒していないことは誰の目にも分かった。根はとも優しい子だった。

小学2年生の頃から愛子の家庭は経済状態が良くなかった。ガスが止められ水風呂に入っていると友達に話し、他の子が驚いて引いていた。お調子者でセンセーショナルな話をして注意を引くのが好きだったので、ガスが止まる度に話をしたが、徐々に周りもそれに慣れて驚かなくなってしまう。他の職員から「佐々木先生は人がいいから、愛子に簡単に騙されちゃいますよ、気を付けてくださいね」と言われた。「子どもが理由あって騙すなら、騙されてもいいですけどね」と返事をした。本当にそう思っていたが、一度も彼女が私を騙すことはなかった。愛子は学童に月曜日から土曜日まで週6日来ていた。夏休みも一日も休むことなく全日学童クラブに来た。コンビニで働く母親は休みがなかった。他の子はお盆休みにはどこかに連れていってもらっていたが、愛子は一日も休みがなかった。それでも、他の子と違い、駄々をこねたりせず、カラッとして学童を楽しんでいるようにも見えた。

夏休み終盤、学童の朝の学習時間に、作文の宿題をしていた愛子が困った顔をして私の所に来た。「てっちゃん（私の愛称）、夏休みの宿題で、夏にお出かけしたことについて書くようになって、どうしよう」と相談だった。私は咄嗟に「学童でデイキャンプに行ったじゃん、それ書きなよ」と話すと「そうか!」と嬉しそうに戻っていた。1日も休まない愛子を見ながら、当時の学校の先生は随分、罪な宿題を出すものだったことを今でも覚えている。

### (3) 中学生時代

「あいつはマジやばい。手を出すな」愛子の中学生時代の噂を聞いたことがあった。私の勤めていた児童館は愛子のいる地域から少し離れた場所にあった。職場に来ていたやんちゃな中学生が愛子の噂をしており、地域で有名な不良だと話していることを聞いた。

愛子のいる中学校の体育祭を覗いたことがあった。校庭の隅に5～6人、髪の毛を染めて服装の乱れた一団が座り込んでいた。その中心に愛子がしゃがんでいた。体育祭ということもあり多くの大人がいたが、周りの人が遠巻きにして、その一団を見ていた。私は懐かしさで、ズカズカと一団に入っていった。見知らぬ大人が来たこと、愛子の仲間が睨みを効かし不穏な空気になる。私が笑顔で「愛子元気か！」と大きな声で言うと、愛子が「てっちゃん！」と小学2年生の時と変わらず、私に飛びついてきた。その様子を見た仲間たちはすぐに緊張を解いた。

見た目には、やや不良娘だったが、愛子の人の良さや世話好きは変わらなかった。小さい子の面倒をよく見る、地元の児童館のお祭りではボランティアで参加していた。やはり愛子はいつになっても愛子だった。

### (4) つぶやき

愛子が高校生になった4月、子ども部のO部長から愛子の様子を聞いた。それからしばらく経った頃、愛子の地元の児童館にいる職員から相談があった。「てっちゃん館長知っていますか、愛子だけど、かなり困った感じになっているみたい」相談してくれた職員は通称やまのり。(児童館は苗字で呼ばず、先生ではない地域の大人として、ニックネームで子どもも職員同士も呼び合っている)。愛子の小学生時代の友達が、愛子のブログを見つけ、やまのりに教えてくれたのだ。

やまのりは私の後輩にあたる児童館の専門職員で、1年間だけが同じ職場で勤務したことがあった。子どもを引き付ける力、あつと驚く

企画力、そしてブルドーザーのようなパワフルな実行力を兼ね備えた信頼できる女性職員だ。やまのりの見せてくれた愛子のブログには、本人の不安な気持ちが綴ってあった。「このままでいいのか。不安で仕方ない。どうしよう。でも大人は信用できない」そんなつぶやきだった。正直驚いた。部長から話を受けてからかなり時間が経っており、児相や子家セン、保護司など、多くの大人が関わっていると聞いていたので、解決していると思いついていたからだ。愛子が本当に困っている、何とか手を貸してやりたい、と居ても立ってもいられなくなった。ただ、愛子はどこに今居るのか全く分からない。

子家センは愛子の住所を知っているはずだと分かっていた。当時は子家センと連携の機会がなく、一瞬、連絡を躊躇したが、高校時代の友人N氏が職員として勤務していることを思い出した。すぐにN氏に電話をした。すると愛子の件は全く解決していない、手の打ちようがないので保留になっているとのことだった。母親が家を出ていった後、子家センや保護司が何度か愛子の所に行き、自立援助ホームに行くように説得を試みたらしい。その度に「うるせえ！」と追い返されていたとのことだった。家賃を払わず立ち退きを迫れたアパートで、親はおらず、お金もなく、どうやって、愛子は生活をしているのだろうか。

### (5) 会いに行く

「今から愛子に会いに行きたい。住所はわかるのか、一緒に行ってもらえないか」と子家センN氏に伝えると、「住所は分かる。行こう」となった。そこで、やまのり職員の所属する児童館長のKさんにも連絡して、やまのりにも同行してもらいたいと依頼した。

私と子家センのN氏は男性で、思春期の女子である愛子と会うには、女性職員がいて欲しかった。また、一緒に仕事をしたことのある、やまのりの動きを私は把握でき、彼女も私の動き方を良く知っており、タッグを組むならこれ以上ない心強い仲間でもあった。大人たちが

次々と愛子に門前払いを受けている。もし、私がうまく話を進められなくても、やまのりがいれば何とかなるかもしれない、という期待もあった。

アパートのチャイムは壊れていた。ドアをノックして私が「児童館のてっちゃんだよ、愛子いる？」と言うと、「児童館のやまのりだよ、アイちゃんいる？」とやまのり。少し間がありドアが開くとマスク姿の愛子が、私とやまのりがいることに驚き、不思議そうな顔をして出てきた。

### (6) 予想を絶する生活困窮を生き抜く

愛子はこの時、風疹に罹って熱があったが、近くの公園で話をすることができた。もともと小柄な愛子は黒いパーカーを頭から被り、背中を丸めていたので、さらに小さく感じた。体調が悪いためか表情も険しく、マスク越しの目つきもきつかった。彼女の不安定な精神状況がさらに険しい顔にしていると感じた。愛子のマスクが汚れており、替えのマスクが買えない状況もすぐに見て取れた。

愛子のアパートには同い年くらいの仲間がいつも2～3人いた。女の子だけでなく、居場所のない後輩の男の子も一緒にいると言う。仲間がお金を持っている時もあり、誰かが何か持って来ると、みんなで分け合って食べていた。愛子の母はいなくなったが、よくごはんを届けてくれる21歳の男性で、親代わりという人がいるという。

バイトをしたいが仕事が見つからない。お金はない。アパートは母親が支払いをしていないため、電気・ガスはもちろん、水道も止められた。トイレはどうしているのか聞くと公園の水道でバケツに水を汲んで、仲間とひとり3杯など決めて風呂に水を溜めている。それで体を拭いたり、トイレを流したりしていた。トイレトーパーもないが、大きなスーパーなどのトイレに置いてあるストックを無断で拝借して使っているとのことだった。

「定時制高校には通っているのか」と尋ねる

と、「交通費がある時は行っている」とのこと。食生活が心配で「学校の給食はおいしい？」と聞くと「うん、おいしかったよ」と過去形の返事だったので、「美味しかったって、今は食べていないの」と聞くと入学して最初の1か月は食べたが、給食費を払っていないので、それ以降は食べていない。「給食の時間はどう過ごすのか」と聞くと、「他にも食べない友達がいる、その子としゃべっているから大丈夫」と。「教科書は毎回持って行くの」と聞くと「お金がないから教科書を持ってない、でも大丈夫。定時制って必ずお休みの人がいるの。その人の机の中に教科書が入っているから借りている」とのことだった。母親は給食費も教科書代も払っていなかったのだ。

愛子の話を聞いていた私もやまのりも子家センのN氏も、彼女が生活に困窮するほど厳しい状況に置かれていたことに、言葉を失うほど驚いた。その中でもたくましく生きていていると思えば、そんな状態で頑張っていたのか、知らなかったと胸が痛くなった。けれども、愛子の生活はそれだけでは終わっていなかった。もっと凄いくことに巻き込まれていたのだ。

### (7) 墜落出産と自首

愛子の同居中の仲間の一つ年上の17歳の女の子がいた。彼女は妊娠しており、急に産気づいて、愛子のアパートの風呂場の前で突然、子どもを産んだのだ。生まれてきた赤ちゃんを一番に受け止めたのは愛子だった。「あたしこうやって受け止めたんだよ」と受け止めた時の手の形を見せてくれた。親戚の赤ちゃんの面倒をみたことはあったけど、生まれたての赤ちゃんを受け止めたのは初めてだったと笑って話した。

病院などで出産するのと違い、予期せぬ場所で突然出産することを『墜落出産』と言うらしい。16歳にして愛子は墜落出産した赤子を受け止めたのだ。その後、救急車で17歳の母と赤ちゃんは運ばれた。今もその17歳の母と一緒に暮らしていると言う。その赤ちゃんは施設

に入っている。17歳の母は、本当は赤ちゃんと一緒に暮らしたいが、仕事がないので子どもを引き取れないそうだ。後でN氏から墜落出産した17歳の子は近隣市の子で、その市の子家センが関与している案件だと教えてもらった。

話はまだ終わらなかった。愛子の同居仲間の知り合いが、事件を起こしてアパートに逃げ込んできたのだ。ニュースで流れるような事件だった。アパートに来られたことに怒り、また、自首するように仲間と説得し、本人と一緒に警察署へ行ったのだ。愛子はただ付き添いで行ったのにも関わらず、何時間も同じ説明を警察官にしなければならなかった。警察ではお腹が減っても何も出してもらえず、いつまでいるのか分からなかった。ようやく警察署を出たのは深夜近く、日付が変わる頃だった。本当に迷惑で疲れたと話していた。その事件のことも耳にはさんでいたので、改めて、私もやまのりも、ただただ、驚愕するしかなかった。

### (8) あなたの幸せを祈って

今の生活をずっと続けることは難しそうだが今後どうするのか、と話は核心に迫っていった。愛子は、二人の友達から「居場所ないなら、おいで」と言ってもらっている。一人の友達は、お母さんと工場と一緒に働いている。愛子も一緒に仕事をしないか、とも言われている。家賃と食費で月3万円くらい入れたら、ごはんも出すという話だった。

自立援助ホームについては考えているかと尋ねると、以前、子家センのやかましい女の担当者が来て、寝起きにワイワイ言われた。何を言っているのかよく分からなかったから、キレて「うるせえ、ばばあ」と言って追い返したから良く分からない。今月か来月に兎相に行って話を聞くつもりだと言うので、N氏に自立援助ホームについて説明をしてもらった。定時制に通いながら、自立援助ホームがバイト先を斡旋してくれる。18歳までホームには居られて、月3万円ホームに入れると朝夕の食事も付いてくる。

バイトで貯金をして18歳以降の生活に備えるという内容だった。

正直なところ、予想を絶する生活困窮状態に陥っている愛子を説得する自信はなかった。愛子を置いて母親が出て行っており、夜遅くまで食べ物も出さず取り調べをした警察を含め、多くの大人が愛子の信頼を失っていたことが分かった。私は「子どもの頃から見ていた愛子と今の愛子は何も変わらない、ずっとあなたの幸せを願っているよ。今、私たちが思いつく中で一番良い選択肢は、兎相を経由して自立援助ホーム行くことだと思っているんだ」と伝えた。

公園で1時間近く話をした。「また来るよ、判断は愛子に任せる。考えておいて」と伝えた。食べ物に困っていると思って、お菓子や食料品を用意しておいた。すると、やまのりも同じ事を考えていて、袋いっぱい食料を持って来ており愛子に渡した。私のかばんに未使用の不織布マスクが3枚だけあったのを思い出して全部渡した。愛子はずっと険しい目つきだったが、私とやまのりからもらった2つの買い物袋を両手に抱えると、少し嬉しそうな顔になり、アパートの階段を上がっていった。

### (9) 愛子の決断

その後、週に1度のペースで、愛子のアパートを私とやまのりの二人で尋ねた。毎回アパートのドアをロックする度、愛子はいらぬだろうか、どこか行ってしまい二度と会えなくなってしまうか、と不安だった。近くの公園でいつも話をして近況を聞いた。

最後は愛子が自分で決めることだけど、自立援助ホームに入るのが、今私たち大人が考える最善の方法だと思うと伝えた。そして、何よりもあなたのことを心配し、あなたが幸せになることを願っていると伝えた。愛子が食べ物に困らないようにと食料品も渡していた。やまのりとは情報交換などしなかったが、不思議と私が買うのを忘れても、やまのりが何か買ってきており、また逆に私が用意してやまのりが手ぶらのこともあったが、いつも何か渡していた。こ

の状態はいつまで続くのだろうか、突然、愛子がいなくなってしまうのではないか、など先が見えない不安がいつもあった。1か月程経った頃、愛子が決断した。「私児相に行って、それから自立援助ホームに行くね」と。

### (10) 出発の朝

児相の担当者とは愛子の件について何度かやり取りをしていた。本人の気持ちが固まり、児相の一時保護に入る際にはどうするか、そうでない場合はどうするかなど。偶然だが、愛子とは関係ない別件のケースでこの担当者と会うことも2度ほどあった。面識もできお互いの考えも何となくわかってきた。子育て課、児相、子家センへその都度、相談と状況報告をした。児相に愛子の決断を伝えたのは週末だった。週末は一時保護施設が混んでいるので、次の月曜日の午後1時過ぎに児相に連れてきて欲しいとの回答がすぐ返ってきた。

翌週の月曜日の午前11時に愛子を迎えにやまのりと二人で行った。気が変わって愛子が居なくなっていないか心配だったが、きちんと時間に出てきた。児相の規則で何も持って行く事ができないので、まさに身一つだった。愛子の同居していた仲間が見送りに出てきた。

「愛子行くなよ」と、何度も引き留める言葉を女の子が愛子にかけていた。愛子は笑いながら「じゃあな、またな」と言って私たちの車に乗り込み、仲間たちに手を振った。愛子と同じ年ごろの3人の男女仲間が私たちの車を見送った。

途中、ファミリーレストランで昼食をとり、余裕をもって午後1時過ぎに児相に到着した。ところがここからが苦しい時間となったのだ。児相の控室に通されて、愛子とやまのり、私の3人で待った。顔なじみになった児相の男性担当者が一時保護施設をあたるので少し待っていて欲しいと出て行った。30分ほどして戻ってきて施設がどこもいっぱい、探していると伝え再び、私たちの部屋を後にした。さらに1時間経って少し顔を曇らせた担当者が「今日、一

度、家に帰るなんてできないかな…」と言い出した。決死の思いでアパートの仲間と別れて、また戻るなどではさすががない、もし戻ったら二度と来られない。「出来ないですね」と返事をすると「そうだよ」と担当者は施設を探す為、事務室へ戻っていった。何とも重い空気が流れた、途中で飲み物を買いにやまのりと二人で出た際、「ここが頑張りどころだね」と声をかけた。何時になっても、決まるまでは愛子の傍にいなければと考えていた。

施設が決まったのは午後4時過ぎだった。愛子も児相担当者も顔が明るくなった。一時保護が区内の施設に決まったので、電車で施設に向かことになり駅まで送って、私たちはそこで別れた。駅に着くとオレンジ色の夕日が愛子の頬にかかっていた。「体に気を付けてね」と愛子に話すと、愛子が私たちに向かい「ありがとう」とポツリと言って手を振った。

帰り道の車中で私もやまのりも憔悴しきっていた。ふと、やまのりが「朝、愛子を見送っていたあの子たち、心配だな…」とつぶやいた。私も同じことを考えていた。愛子は何とか施設へ繋ぐことができたが、どこの誰か分からない子だが、他にも支援を必要としている子を目の当たりにしていた。「自分たちにできる範囲で、できることをするしかないね」と自分に言い聞かせるよう答えた。

### (11) 安心したでしょ

その後、愛子とは意外に早く再会できた。愛子が児相の一時保護所へ行ってから2か月ほど経ったある日、児童館の玄関に自立援助ホームの職員さんと一緒に愛子が挨拶に来てくれたのだ。「心配していると思って来たんだ」と話してくれた。険しかった顔はそこにはなく、明るく朗らか表情で、自立援助ホームの若い女性職員と仲良さそうに立っていた。

愛子は自立援助ホームの紹介したバイトに就いた。ガソリンスタンドで働いており「月14万円も稼いでいるだよ」と教えてくれた。定時制高校にも通える場所にある施設を見相が見つ

けてくれたのだ。「冬にはホーム全員でスキー旅行に行くんだって。ホームは家族だから、私、生まれて初めての家族旅行なんだ」と嬉しそうに教えてくれた。生まれて初めての家族旅行という言葉にショックを受けたが「それは楽しみだね、よかったね」と話した。

次に愛子に会ったのはそれから4年後だった。私は異動して愛子がよく通っていた児童館にいた。偶然にも愛子が彼を連れて訪ねて来たのだ。愛子は妊娠しており、結婚すると言うのだ。とても優しい表情の彼がニコニコと愛子の傍にいた。「てっちゃんがここにいるって知らなかった、報告できて良かった、結婚するんだ、これで安心でしょ」と話してくれた。「根の優しい子なんです、どうぞよろしく願いいたします。」と彼に話した。

現在、愛子はこの配偶者とお子さんと他県で暮らしている。生まれてきた子どもの名前はどんなキラキラネームかと心配したが、驚くほど感じ良い名前だった。彼の祖母が、祖父の名前から一文字とって名付けたとのことだった。義祖母が名付け親になることを愛子は快く受け入れたと聞いた。気立てのいい愛子らしいと思った。

### 3. 実践録として

#### (1) 職務を超えた業務とソーシャルワーク

本件は日常の勤務の範囲を超えて、関係機関と連携して解決（福祉援助・ソーシャルワーク）を図った事例だ。子どもが困難な状況おり、しかし、通常の勤務の中では対応できない内容のものだった。

愛子を見相へ送った後、上司である課長と部長に報告した。後日、部長に会った際、「部長が助けてあげてくれと言ってくれたので、業務として直ぐに動けた、やまのりの応援もK館長が許可してくれたので本当に助かりました」と伝えると「子どもが困っているんだから、館長だし自分で判断しろよ。もちろん報告はするんだぞ」と言われた。これをきっかけに、私は施設を超えた業務を進める場合は、館長判断とし

て躊躇せず、時を逃すことないように心がけている。

ただし、押さえておくべき点がある。①自分の職場の仲間へ説明と報告を密にする。施設を離れるので職場の仲間の支えが必須である。②主管課の上司へ報連相を定期的にする。現在どんな事例で対応しているか報告する。関係機関との連携を上司が知らない事がないようにしている。③リスクマネジメントの実施。自分で気が付かないリスクが発生していないか周囲の意見も大切にす。この3点を押さえた上で業務範囲を超える仕事を進めるようにしている。

#### (2) 課題は今も続いている

居場所のない子どもたちについては現在も社会問題ではないだろうか。東京の「トー横」、大阪の「グリ下」、名古屋の「ドン横」など言葉がある。現在も大人を信用できず、傷つき、仲間や居場所を求める子どもたちがいる。

愛子は偶然、児童館職員がキーパーソンになり介入できた珍しい事例ではないだろうか。だが、あの時の愛子の仲間までは、私はとても対応することができなかった。仕事として、こういった子どもと話をする職業もほとんど存在せず。居場所のない子への対応をどうするか、何処の機関が対応するのか、誰がやるのかという課題は続いている。

#### (3) 未来を担う子どもたちの一助となるように

児童館、学童クラブ、児童相談所、子ども家庭支援センター、保育園、学校、放課後等デイサービス、フリースクール、子ども食堂、NPOなど業務・ボランティアを問わず、子どものために頑張っている大人がいる。課題は多くあるが、一期一会を大切にす、目の前の子どもに優しい声をかけることが、未来を担う子どもの成長の一助になると信じている人であろう。この実践録は、愛子の様な子が頑張っていた記録を残しておく事に加え、子どもの為に奮闘した大人が、子どもの役に立ったと思える結果につながった例として、現在、頑張っているすべ

ての人の励みになるのではないか、という思いも込めて執筆させてもらった。

実践録を作成するにあたり、当該児童だった愛子本人に執筆の許可をもらった。愛子の友人に頼んで、SNSで依頼文を送ったところ、愛子から返事があった。

「てっちゃんへ、そういうことなら構いませんよ（論文に記載すること）。あの当時は色々なことがありましたからね（笑）。色々な経験をし、色々な人に支えてもらって今の私が居ます。確かにあの当時は辛かったと思うことは幾つもありますが、今は実母とも仲良く連絡もとっています。児相に入り自立援助ホームを紹介してもらい、そこに入りましたが、その方もとてもいい人たちで今でも食料を送ってくれたり、心配して連絡くれたりしています。私の人生は色々な人に助けてもらい、褒められ、叱られ、支えてもらい様々な経験をしたおかげで頑張れています。また、息子を連れて会いに行きますね！」

愛子と会話したのは何年振りだろうか。この文を読んで改めて言いたい「安心したよ」と。立派な大人に、素敵なお母さんになった愛子。家族と仲良くいつまでも幸せに暮らして欲しい、心からそう願っている。